

# ぶらり近江のみち 第17回

## - 「白鳳の町」常盤 -



▲写真は琵琶湖博物館からみた常盤地区（前方に見える三角の山が近江富士）

琵琶湖の烏丸（からすま）半島にある琵琶湖博物館（草津市の西北端、下物町）と、ここから湖岸を南へ約2.5kmの同市志那、両地区を基点にそれぞれ東へ約3km入った四角い区域を常盤地区と呼ぶ。この地名は、日本書紀天智天皇3年（664）に記された淡海国栗太郡「盤域村主殿」（いわきすぐりおう）というこの地方一帯に勢力を広げていた氏族の名前に因んで名付けた。



平成14年、草津市の「地域協働まちづくり推進事業」の指定を受けた地区公民館が、3年計画で地域に埋没する白鳳時代の廃寺院跡（7か所）現存する神社、出土品など貴重な歴史を伝える文化財と取り組み、そのすばらしさと誇りを町づくりの根底に据えた「町づくり勉強会」を続けている。

会員は約60人、市の文化財保護委員会の専門員を講師に、現在までに3回の勉強会を開いた。出席者は第1回36人、第2回37人、第3回20人、いずれも寒い時期だったが、高田久義館長は「上々の出足でした。会員さんたちは、なぜもっと早く気付かなかったのか...との思いで、わが町のすばらしさに改めて感激しておられました」と目を細めていた。今年はこの勉強会を大人だけでなく若い人達にも伝え、幅広い運動にしたいという。今回は、この学習内容などから常盤ならではの白鳳期の廃寺にスポットを当ててみた。

**弥生以来の米どころ** 琵琶湖博物館の二階展望台から眺めると、東は南側の草津から目の前の常盤、そして北の野洲町まで、湖岸から東側約8kmは、山一つない田園地帯、その中に集落が点在。後方の西側は、すぐに琵琶湖に連なり、対岸の比叡山麓の大津市につながっている。

この広大な農地は、三重県境の御在所岳（二一〇）を源流に、鈴鹿山脈の南斜面を経て、甲賀郡内の山間地を貫流、琵琶湖に流入する手前の守山市、野洲郡で広大な沖積平野を形成した泉下最大の河川・野洲川がもたらした。この川は別名「近江太郎」と呼ばれる洪水河川で、洪水ごとに分水脈を増やして肥沃な田畑地帯を広げてゆき、弥生時代から現在まで日本の米どころといわれるようになった。

日本書紀安閑天皇二年五月条（五三〇頃）に「近江国の葦浦屯倉（あしくらのみやけ）」の所在地として常盤地区の芦浦付近が有力視されたのは、大和朝廷の直轄地、朝廷の経済基盤を設置するのにふさわしい生産力のある地であったことを証明している。

**大和に勝る白鳳寺院の数** 常盤の特色といえば、狭い地域にもかかわらず、集落の中心に一边が百五十軒から二百軒に及ぶ大伽藍が七軒も美しい麓を競っていたということ。市史によると持統天皇六年（六九二）のころ、天下の諸寺は五四五か寺。うち大和の国（奈良県）では飛鳥時代から存続する寺院は二十三か所。河内国（大阪府南、中、北河内郡）でも白鳳後期の寺院数は六十七か寺といわれている。

これに対し滋賀県内には、白鳳寺院跡と推定される瓦の出土地が百五十か所、すべてが寺院跡とはいえないにしても畿内各国に比べてはるかに多い。これからみれば常盤地区にある七か所の廃寺跡は、飛鳥や大和に匹敵するといっても過言ではない。

常盤になぜ白鳳寺院が多いのか、その第一の理由は、学習会でも取り上げられているように、天智天皇が六六七年、常盤から琵琶湖を隔てた対岸の大津市に、近江朝をつくり、遷都されたこと。天皇は、大津宮を防備するために宮の南方に園城寺遺跡を、北側に南滋賀、穴太の二廃寺を建立された。このほか対岸の常盤地区にも軍事的な観点から寺院を建てられた。

常盤を選ばれたのは、対岸であると同時に遷都以来、天智天皇は演習地（狩り場）の蒲生野を往復した際、身内の大海人（のちの天武天皇）大友皇子（のちの弘文天皇、壬申の乱で自殺）鵜野皇女（のちの持統天皇）や高官とともに、瀬田唐橋を渡って湖岸を近江八幡、八日市を往復する都度、常盤地区の重要さを誰しもが知っていたからだ。

第二は、母君の斉明天皇崩御のあと、天智天皇が称制（即位せず皇太子のままで政治をとる）の地位にあつた六六五年、百濟（くだら）高句麗（こうくり）からの亡命者（男女）四百人を近江国・神崎郡に移して田を与え、四年後には鬼室集斯（近江朝の文部大臣）ら二千人を蒲生野に居住させた。この中には美術工芸の技術を身につけた人々が数多く混ざっていた。

第三は、この間に新政府は、律令制度の完全を期す意味で、大化以後五回（一回二百数十人）にわたって遣唐使を派遣した。これらの人々が取り入れた唐文化と朝鮮の亡命民の技術とその中央集権の力が壬申の乱後いっそう充実したこと、さらに天武、持統

両天皇の盛んな造寺、造仏の運動とあいまって、この常盤地区に白鳳の文化の花が咲くことになったのではなからうか。以下は同地区に残る廃寺跡である。

から江戸時代まで「船奉行」として湖上船管理に当たっていた。

### 花摘寺廃寺

下物町（おろしも）の天満宮辺にあった聖徳太子開基の寺院跡で、付近の田畑などから出土する瓦の特徴から白鳳時代（七世紀後半）の創建と想定される。現在天満宮境内には塔心礎と思える巨石や多くの礎石が残っており、この近くに中心伽藍があったと思われるが、昭和五十六年度の寺域内北東部の調査で寺院の廃絶時に形成されたと思われる瓦だまりからの出土品で、平安時代に寺院が廃絶したと思われる。花摘寺という名は、古代までさかのぼったものではなく、夏行、夏安居という宗教行事の花を摘む行為に由来するものらしい。

### 宝光寺跡

北大萱の中心から少し西寄にある宝光寺付近から白鳳時代の瓦が出土した。集落内をめぐる小径や道路、水路に旧地割を示す明瞭なもの



▲宝光寺廃寺  
この付近から白鳳時代の瓦が出土した。寺域内に天武天皇の剃髪がある。

### 長束廃寺跡

芦浦町観音寺廃寺跡から南南東約二百メートルを経て南北一五〇メートル、東西二百メートルの地割痕が条里制の中に残っており、条里施行時にはすでに寺院が存在したと思われる。現在中心付近は墓地で、その周辺から白鳳時代の「赤瓦」の破片が発見される。

### 芦浦観音堂廃寺跡

寺域が石垣で囲まれ、一見城郭を思わせる。観音縁起によると聖徳太子が開基し、泰河勝の仮本堂修理工事で

素弁八葉蓮華文軒丸瓦が、昭和五十六年の工事で布目瓦が出土し、白鳳時代の寺院跡とみられる。境内には、室町時代の阿弥陀堂、江戸時代の「観音寺書院」（いずれも国指定文化財）がある。またこの寺院は室町



▲芦浦観音寺堂廃寺跡  
均整の城郭を思わせる強固な石垣に囲まれている。



▲花摘寺廃寺  
下物町の天満宮広場を中心に花摘寺があったと思われる。



▲天満宮入口に残る花摘寺廃寺跡の礎石  
▼観音堂廃寺  
下物町の観音堂廃寺跡の常光寺境内には古代を思わせる大樹が田園の中にそびえる。



（曾我一夫記）

が残り、小さく見積もっても百数十四方の寺域が想定される。これまでに知られる瓦は二点で、いずれも単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、同じものが大津市大萱の東光寺廃寺跡でも出土している。

### 片岡廃寺跡

下物町の観音堂廃寺跡の南東約三百メートルの白鳳寺院跡と考えられているが、出土物や寺域を示す地割痕など有力な資料は確認されていない。しかし片岡町小字西蓮寺から案の内にかけて白鳳時代の古瓦片が

散布、なおこの付近から小字檜皮堂、聖前（印岐志呂神社境内）にかけて痕跡ながら東西南北の地割痕がうかがわれる。

### 大般若寺跡

志那中町に存在する白鳳寺院跡であるが、寺域を示す明瞭な地割痕はない。しかし昭和五十二年度の圃場整備事業にもなう発掘調査で寺域に近接すると思われる溝が発見され、同時に白鳳時代の瓦が出土している。

### 観音堂廃寺跡

下物町の観音堂は、二百数十四方と思われる大きい寺域の痕跡を条里地割のなかにとどめた白鳳時代の寺院跡。下物町の花摘廃寺跡はここから東へ約二二三〇メートルの所にあって、昭和五十、五十一年度に四周の調査が実施され、四周の溝から単弁八葉軒丸瓦（七世紀後半）とこの期の「赤瓦」や複弁八葉丸瓦（七世紀末・八世紀初頭）の瓦が出土した。そのうち単弁八葉軒丸瓦は、湖西の堅田衣川、穴太、南滋賀、園城寺各廃寺跡から出土した瓦と似ており、七世紀後半の湖西とのつながりのあったことをうかがわせる。